旧高梁尋常高等小学校校舎の建築調査

はじめに　奈良文化財研究所は2011～2012年度に高梁市からの受託で市指定文化財・旧高梁尋常高等小学校校舎の建築調査をおこなった。高梁は岡山県西部の山間部にある城下町で、南流する高梁川の東岸に城下町があり、町の北側には現存天守では城下との比高差がもっとも大きいといわれる備中松山城のある臥牛山がそびえる。旧高梁尋常高等小学校は城下町の旧武家地に当たる向町に位置する。明治37年（1904）に建築された洋風の校舎で、昭和47年（1972）まで高梁北小学校の現役の校舎として使用され、学校の統廃合により役目を終えて昭和53年（1978）から郷土資料館として活用されている。残っているのは教員室や講堂などの管理部門を用途とする本館部分で、一般教室は現在図書館の敷地となっている南側や福祉会館となっている北側に接続していたが、すでに取り壊されている。岡山県内には重要文化財に指定されている遷喬小学校（真庭市）、津山中学校（津山市）をはじめ、比較的多くの明治の学校建築が残る。高梁市内にも当校舎のほかに順正寮（明治29年；県指定史跡）、吹屋小学校校舎（明治33～42年；県指定有形文化財）が現存する。また、高梁城下町には学校建築以外にも高梁基督教会堂（明治22年；県指定史跡）などの明治の洋風建築が残る。

設計者　当校舎には棟札や竣工当時の写真が残されており、建設関係者の名前が判明する。新築校舎設計者、工事監督主任として記されるのは地元の大工、妹尾友太郎で、現存する同時期の近隣の棟札等には名前の出てこない人物である。恐らく、建築の専門教育を受けた人物ではないと思われるが、当校舎においては様式、技術ともに西洋建築に対する深い理解が見て取れる。近隣の公共建築に携わる中で西洋建築を学んでいったのであろう。

建物の特徴　建物は桁行13間、梁間７間の大規模な木造２階建、寄棟造桟瓦葺で、南北棟の西を正面とし、中央に瓦棒銅板葺、照起屋根の玄関ポーチを張り出す。東西の屋根には２箇所ずつドーマー窓を上げる。１階は玄関、教員室、階段室を兼ねた広間、２階は階段室、講堂としていたが、１階は昭和初期頃と民俗資料館に改装する際に２度にわたって改造されており、現状は階段室を兼ねた広間が南端の階段室と中央寄りの前後２室に分けられている。ポーチを除けば総２階の建築で、１・２階境は蛇腹、軒裏は蛇腹と軒天井による短い軒の出とし、スティックスタイルと呼ばれる柱や楣を外観に現した様式を採用している。ポーチは方杖によって深い軒を出し、方杖や筋違の面取り、栓の表現など細やかなデザインを施す。このあたりは充分に様式を咀嚼していることをうかがわせる部分である。一方、内部は教員室の竿縁天井や講堂の二重折上格天井、内法長押の使用など、和風の要素がごく自然に取り入れられている。瘤出し面取りの二段の石造布基礎に土台を置き、側柱は正面中央の玄関廻りを除き通し柱とする。外観に見える柱は付柱で、隅柱４本のみはやや太くし外側に化粧で見せる。入

図41　校舎西正面

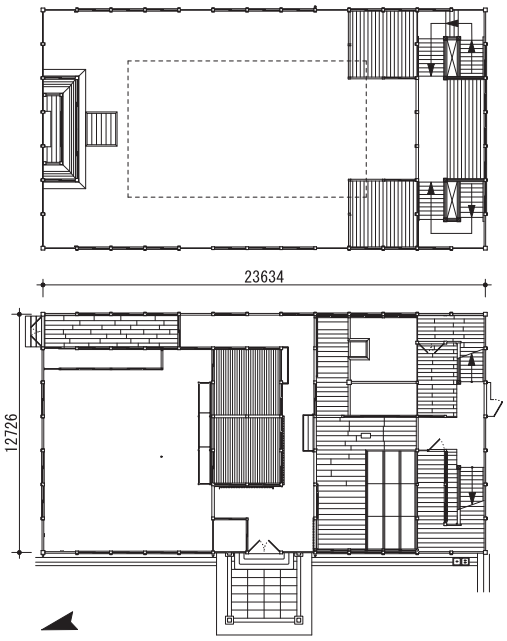

図42　１・２階平面図

念な地業がおこなわれたと見られ、現在も柱の不同沈下に起因する変形は規模に対し比較的小さい値にとどまっている。小屋はクインポストトラスで、桁行約18m、梁間約13mの無柱空間である２階講堂にも架かるが、力学的に充分な理解にもとづいて設計されており、高梁市による適切な維持管理の効果もあって建築後100年以上を経た現在も概ね健全である。

構造的な未熟さ　当校舎の最も特徴的な部分は、２階の床組にある。１階内部の間仕切りに関係なく１間置きに立てられた前後側柱を梁間全長約13m、成約60㎝の床梁（大引）が南端の階段部分を除く11通りを繋ぎ、根太を載せて２階床を張る。これほどの長大材の使用はあまり例がないと思われるが、用材については臥牛山国有林のモミが払い下げられて伐り出して使ったという言い伝えが地元に残っている。現在ではほとんど入手不可能であろう。床梁は中間を１階間仕切りの柱で支えられることになるが、通常の一般教室の梁間が７ｍ～7.5ｍであるのに対し、当校舎の当初１階間取りは北側の教員室が桁行５間、梁間６間（約11m）、南側の広間には南端に階段があって変則的であるが梁間７間（約13m）持ち放しのスパンが２通りあり、木造単材の床梁ではほとんど無謀とも言える構造を有している[1)]。２階床には早晩沈下が生じ、これが階段室兼広間を補強を兼ねた間仕切り柱を設けて３室に分ける改造に繋がったと見られる。また、教員室内には補強の鉄柱が追加され、おそらく同時に床梁と根太の間に飼物をして２階の床の不陸を調節している。長大な床梁の使用は１階間仕切の自由度が高い反面、結果として不具合が生じた。逆に補強をおこなうにあたっても自由度が高く、軽微な補強で100年を超える寿命をこの校舎にもたらしたものと評価できよう。展示のために改装された１階南側の旧広間部分以外は内装を含めて実際建築当初の状況が良く残っている。

まとめ　当校舎は西洋建築様式の正統な受容と構造的な未熟さをあわせ持つ。当初の構造上の不具合がどのような経緯で生じたのかよく解らないが、そのアンバランスな部分を含めて明治後期の地方における建築生産の様相について大いに示唆に富む建築である。　**（林　良彦）**

註

１）現存最大の木造建築、江戸時代再建の東大寺大仏殿の最大スパンは約23m、これを支えるためにはるばる日向国から末口１ｍを超える赤松の丸太２本が運搬されて使用されたが、明治の修理時には大きな撓みが生じており、鉄骨トラスによる補強がおこなわれた。

図43　梁間断面図　1/150